

常照

第778号

何がめでたい

小説家、佐藤愛子さんの書かれた「九十歳、何がめでたい」というエッセー本がベストセラーになったのは昨年のことでありました。詳しく読んだわけではないのですが、時事ネタや人生相談に多少辛口で物申す内容でありました。『新幹線を三分速くするような文明を進歩させる必要はない。進歩が必要だとしたら、それは人間の精神力である。』とか、何でも責任だ訴訟

だという世の中どうなんだという歯に衣着せぬ語り口は多くの読者の心をつかんだようです。

しかし、中身は元より多くの人がそのタイトルに驚かされ、ハッとさせられたのではないでしようか？元気に長生きすることは、人間の憧れかもしれない。しかし、それは長生きを夢見ている若者だけであって長生きしている当の本人は、あまり良いように思っていないのかもしれない。佐藤愛子さんは本書で「加齢で足が重くなり、ノロノロ歩けばつまずき、後ろから来た自転車にベルを鳴らされ舌打ちもされる」と嘆いていらつしゃいます。誰かに「九十歳といえは卒寿じゃないですか！おめでとうございます」と祝われ

でも「卒寿！邪魔者扱じやまものあつかいするくせに何がめでたい！」という心境だったのかも知れません。我々は長生きに対して少し考えてみた方がよいのかもしれない。

かへすがへすうれしく候そとふ

もつとも、「長生きなんてしたくない」という方もいらつしやるでしょう。お金がかかるだけだとか、周りの人が先にいなくなつて寂さびしいとか、年配の方からよく聞きます。しかしよくよく考えてみれば授あづかりかつたこの命、寿命のことなど自分で調節できるわけではないのです。

思えば親鸞聖人も鎌倉時代というその昔に、九十歳まで長生きされたお方

でありました。一般的には「宗祖は伝道教化に勤しまれたご苦勞の多い九十年でありました。」とお慕したい、お敬うやまい申しあげるわけでありますが、当のご本人はどのような心持ちであつたのでしょうか？

八十歳頃のお手紙であります。お手紙で「明法御房の往生のこと、おどろきまうすべきにはあらねども、かへすがへすうれしく候そとふ」とあります。年齢でいうと六十八歳とも伝えられてゐる仲間の明法房さんが亡くなつたという知らせを聞いてのお手紙であります。何だつたら他に亡くなつた方のお悔くやみ？お喜び？も一緒にまとめて書かれてゐるのです。しかも手紙の冒頭にさらさらつと書かれてゐるの

を喜ぶことができたのでしよう。

なにごとともみなわすれて候

で、本題ではないのです。驚くべきことではない。喜ばしいことじゃないかと記されているのです。もう少し詳しく言う。平素より聞かせていただいていた教えのとおり、お浄土参りができたのです。阿弥陀さまのお慈悲により往生が定まったということは、願いが叶ったということです。めでたいことではありませんか？とこんな感じの内容です。誤解してはいけません。非情ではないのです。情の上からは寂しく辛いことだったかもしれませんが。しかし寂しいというのはこちら側の感情であって、命終え、仏として生まれて往かれた方には何の心配もないことです。何の心配もないからこそ、私情を超えたお慈悲の確かさ、ありがたさ

では、ご自身の死期について親鸞聖人はどう思われていたのでしょうか。晩年八十五歳の頃、お手紙の中には『目も見えなくなってきた何事もみんな忘れてしまいましたので、人さまに明瞭めいりょうに申し上げることのできる身ではありません』というような事を吐露とろされております。息子を義絶せねばならない苦しみに直面し、あるいは長寿であつたがために子に先立たれてしまうという悲しみもその身に背負つておられたことでもあります。現代のように医療が発達している世の中の九十歳でさ

え「何がめでたい」というのですから、鎌倉時代の九十歳の心身の疲労や不安というのはただごとではないはずです。正直な方だと思いません。ただその中であつてもお念仏を忘れない日々であつたことは間違いないのでしよう。身の辛さ、情としての辛さはあつても、それを引き受けてくださる阿弥陀さま、その確かさを喜べる日々を全うされたことでありましよう。

結果、長生きした。結果短命であつた。私達の命はそうあるものなのでしよう。報恩講の時期です。どうぞお手次の御寺院の報恩講へはキチンとお参りください。親鸞聖人のご生涯から私達も確かな道を聞かせていただきましよう。

十一月の常例布教(ご法話)のご案内

○前期 十一月七日(水)～十一日(日)

講師 東京教区神奈川組長念寺

小林 教善 師

○後期 十一月十三日(火)～十六日(金)

講師 奈良教区広瀬組善巧寺

登川 緑乃 師

○場所 小樽別院内

○時間 午後二時(法要終了後)～午後三時半

浄土真宗のみ教えについて布教使にご法話を
して頂きます。どうぞお誘い合わせいただき、ご聴聞に来院くださいますよう、お待ちしております。

発行所

☎047-0017

小樽市若松二丁目四番十七号

本願寺小樽別院

電話 (〇一一四) 二二一〇七四四番
FAX 二九一四〇八〇番
テレホン法話 二七一一六一六番